

長野環境人士

自然に優しく、暮らしを楽ししく

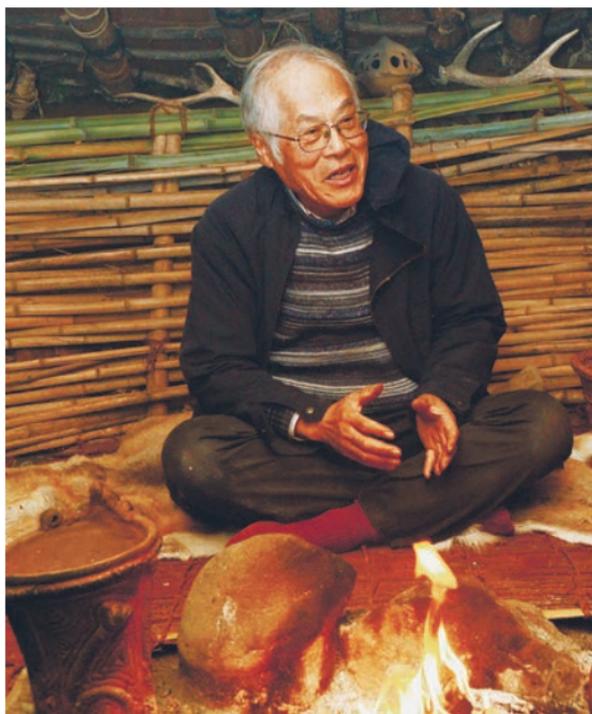
小林光さん対談企画

建築家、建築史家
藤森照信さんと語る

茅野市宮川出身の建築家、建築史家の藤森照信さん(78)が昨秋、ちの観光まちづくりに推進機構主催の企画で市民とともに同市豊平の尖石遺跡、与助尾根遺跡にほど近い場所に竪穴住居「古過庵」を造った。縄文時代の暮らしを紐解くヒントが感じられる建物として今後、様々な活用が見込まれる。藤森さんがこの住居で大切にしたのは断熱、防寒によつて冬でも十分に生活できる居住空間だった。

周囲の自然から調達できる材料を使って建てた住居の特徴は土の壁。冬場の冷たい空気を防ぐため、隙間のない壁造りに取り組んだ。座布団は動物の毛皮を使用した。対談相手の小林光さん(75)は現代よりもずっと少ない熱量で一定の快適性を保つ空間づく

くりや知恵に驚いていた。藤森さんは「素晴らしいデザイン性のある土器や土偶を作った。だらけの家で我慢したとは思えない」と語った。



竪穴住居「古過庵」で建築に込める思いなどについて語る藤森照信さん(78) 2024年11月24日、茅野市豊平

小学校2年の時に生家の改修を手伝い、建築の面白さを知った藤森さん。世界的な建築家の原点はやはり地元茅野市にあり、地元の人々の支えが活躍の源にもなっている。「茶室には建物の本質がある」とも語る藤森さんは、建築を通じて自然と工業力、科学技術の間の矛盾を、調和させようとする試みを続けている。

(野村知秀)
9面に対談

日本建築の原型は縄文・八ヶ岳に

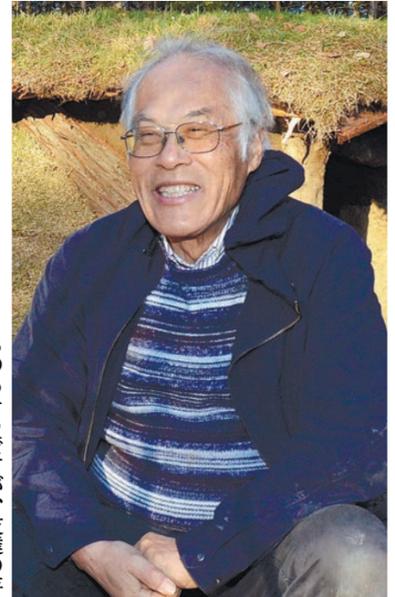
長野環境人士

自然に優しく、暮らしを楽しもう

藤森 照信さん

対談

小林 光さん



藤森 照信さん 78

建築家、建築史家。東京大学名誉教授。東京都江戸東京博物館館長

東京・欧州の建物に憧れ

小林 建築に関心を持ったのはいつ頃からですか。

藤森 小学校2年の時ですね。茅野市宮川にある実家は江戸時代の民家でしたが、建て替えることになりました。当時、私の叔父さんが大工をされていてね、実家に住み込んで工事をしていました。その際、私に手伝えというのです。最初はなんでこんなことしなくちゃいけないのと思いました。叔父さんがあまりにも真剣に教えてくれるので、なんだか面白くなってきましたね。これが原点でしょう。

藤森 一言でいえば憧れです。子どもの頃、周囲の民家は江戸時代からの建築がほとんどでしたが、学校や病院は洋館でした。そうした施設の先に東京があり、さらに先にヨーロッパがある。そう思っていました。

小林 国内外に数々の作品を残してきた藤森さんですが、地元にも多くの建築物があります。地元で建てることへの特別な思いはありますか。

藤森 木材については地元にある旧知の建材屋さんや製材屋さんに頼んでいます。地元だけでなく、全国で仕事をする際も製材は地元で頼んでいます。山の木を建築に使用したいからです。こだわりの木を使うと、山を大切にすると、頼めるのは地元の製材屋さんですね。地元での建築は依頼があ

るのもそうですが、友達の存在が大きいんです。

小林 建築に対する今の風潮をどう感じていますか。

藤森 建築の大切さって昔の方がよく理解していたと思います。家が建つと、知り合いを集め、主人が建築でこだわった点を来客に伝える習慣がありました。建築にかかわるお金は非日常のはずですが、今は関心を持たない方が増えているように感じます。3万円の服を買う際にたたくさんのお店を巡って決めるのに3000万円の家を建てるのもあまり時間を掛けずに業者さんの言うがままです。もったいないですね。家は人生最大の買い物。もっと関心を持ってほしいのではないのでしょうか。

茶室に建物の本質

小林 藤森さんの作品には茶室が表現されていますね。茶室にどのような印象を持たれていますか。

藤森 茶室には狭いながらも建物の本質が詰まっています。原形と言い換えてもいいでしょう。最初に建築を理論的にとらえたのは古代ローマ人です。古代ローマ時代の建築家ウィトルウィウスが書いた「建築十書」は世界最古の建築理論書とされています。「モナ・リザ」など精巧な絵画を残した画家のレオナルド・ダ・ヴィンチはこの書籍から有名な「ウィトルウィウスの人体図」を描きました。日本では千利休が手掛けた茶室が日本の伝統的な建築様式の一つ「数寄屋造り」の原点となりました。そうした歴史を背景に建築を見てほしいですね。

小林 この度、茅野市の尖石遺



小林 光さん 75

元環境省環境事務次官。東京大先端科学技術研究センター研究顧問。茅野市行政アドバイザー(環境分野)

縄文住居はレベル高いはず

跡、与助尾根遺跡にほど近いこの場所(青少年自然の森)に竪穴住居を造りました。どんなメッセージが込められているのでしょうか。

藤森 この竪穴住居、居心地いいでしょ。縄文人はこの地に集落をつくりました。豊かな水、北八ヶ岳から霧ヶ峰和田峠にかけての1帯で質のいい黒曜石が大量に採れたことなど要因は数多くありますが、冬でもある程度居心地よく暮らせる住居を造れたからという理由もあると思うのです。そうであれば、茅野には日本の建築の原型があったといっていると思えます。全国ではあちらこちらで縄文時代の竪穴住居が復元されています。

小林 縄文時代は約1万年も続きました。しかも、あれほど素晴らしいデザイン力を持った土器、土偶を作った人々です。そんな人たちがあんな家を作ったとはどうも思えないのです。自然から調達できる材料を使い、石器など当時の道具と技術力を用いてつくった空間は相当レベルの

ですが多くはすきまだらけのあばら家のようなものです。縄文人は冬は越せません。縄文人は断熱を考えていたというメッセージをこの竪穴住居に込めました。

小林 縄文人は知恵を絞り、暮らしやすくしようと努力していたということですね。



藤森照信さんが昨秋、茅野市の与助尾根遺跡近くに新たに手掛けた竪穴住居「古過庵」の中で語る藤森さん(左)と小林光さん(右)＝2024年11月24日

自然の木が発する情報

小林 茅野市に建てた我が家で次世代省エネルギー基準を上回る断熱性を実現しました。これ以上の断熱や発電のため、900万円ほど余分に工事費が掛かりました。補助金を活用したため実質的な負担増は約600万円。高性能化に投資した資金の回収期間を試算したところ、20年を下回りました。建物の寿命よりもはるかに短い期間で断熱性などの初期投資を回収できます。家づくりで断熱以外にもポイントはありますか。

藤森 部屋から屋外に出るまでの間に引き戸があり、窓の下枠が床面とほぼ同じ高さとなっている掃き出し窓があること。その先に外があるという連続性を守ってほしいですね。それから室内には木

を使っています。自然の中で育まれた木はいろんな情報を持っています。不規則性とか、ぬくもりとか、へこみとか。木に対するそうした感覚を大切に、できれば無垢材を利用してほしいです。

小林 その心はなんですか。

藤森 私は信州で育ち、無意識の中に自然と工業力や科学技術との間の矛盾を感じて育ったと思っています。大人になり、その矛盾を意識するようになりましたが、同時に何とか調和できないかという挑戦を続けてきました。

小林 自然や生態系について知り、関心を持つ人が増えれば増えるほど環境を大事することの価値に気が付きます。そうした価値にお金を払うようになれば、さらに環境にいい技術が生まれ、発展し、自然と人間のいい調和が図られる

自然と科学技術との調和をさせよう

高いものだったはずですが。

小林 実際に造ってみてどんな感じがありましたか。

藤森 この竪穴住居では「防寒」を大切にしました。それには隙間から風が入ってはだめで、冷たい空気を防ぐには穴を掘り、土壁にするしかありません。それから毛皮。動物の毛皮の暖房効果は相当なものですね。

小林 はい。毛皮の座布団に座ってみて、その暖かさに驚きました。中心部のいろりはあまり大きくないですが、現代の薪ストーブよりもずっと少ない熱量でこの暖かさを実現しています。冬を生きる縄文人がイメージできます。縄文時代の技術だけで十分に暖かく暮らせたのではないかと実証は現代生活に対する批判でもあるのでしょうか。

藤森 そうですね。住まいはちゃんと造ってほしいという思いはあります。簡単に選ばず、居心地よい空間づくりのために努力してほしいです。ポイントは断熱。初期投資は大きくなりますが、その家で過ごす時間の長さを考えれば大事にすべき点です。

小林 なるほど。

藤森 それにしてもここ(尖石・与助尾根遺跡周辺)は本当にいい眺めだなあ。

小林 縄文人も外を眺め、同じような気持ちを抱いたのでしょうか。現代を生きる人も、その気持ちを持ってほしいですね。



地元の茅野市宮川高部に建つ藤森照信さんの作品群